

風のように

甘木教会



主任牧師：白川道生

牧会委嘱牧師：竹田孝一

「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。 ルカによる福音書15:4-5

【説教要旨】

イエスさまの喩え話しが、誰に向けて話しているか、そして、誰が聞いているかということを知ることが、話しを理解するのに役に立ちます。

徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。するとファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪びとたちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言い出した。

この喩え話は、徴税人や罪人、ファリサイ派の人、律法学者が聞いていたのです。ファリサイ派の人々は、律法を守る超宗教的エリートなのです。彼らは、律法を守る人と守らない人を分離し、宗教世界のユダヤをリードしていたのです。社会の安定はあったのですが、人を分離させ、人を迷いださせているという犠牲があったのです。自分たちの正しさを徹底的に他人におしつけて、出来ない人を排除していく。その排除された人

が**徴税人や罪人**で、このファリサイ派的生き方は、ガザで起きているイスラエルの軍事行動までつながるのかもしれませんが。

迷いでた1匹が**徴税人や罪人**です。1匹は群れの論理に従わず、出たわけですから、捨てられても良いわけで、数の論理からすると99匹の命を助けることが大切であるのは常識です。

律法を守る人と守らない人を分離し、数の論理、力の論理で私たちが生きている社会に一匹が見えなくなったままで良いのかと**ファリサイ派の人、律法学者、**私たちにイエスさまは問いかけています。

常識というものに捕らわれずに、自分の群れ、社会から迷い出た人に目を向ける感性が人として大切なことではないかと私たちに問うているのではないのでしょうか。

「九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。」と問いかけつつ、イエスは、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回ると言われるのです。それがイエスさまのみ心であるというのです。九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回る心を私たちにもそうであって欲しいと願っているのです。

また、迷い出た羊はまた私たちでもあるということです。**徴税人や罪人**であるというのです。私はなんと羊飼いであるイエスさまから遠い、迷い出ていた存在であるかということです。自分こそ神に見つけ出される迷子の羊であるのです。しかし、イエスさまは、迷いでた羊にすぐに気づき、目を留めてくださるのです。自分が神に愛され、見つけ出されたのです。

九十九匹の羊を残して、見失った一匹を見出すまで探し回られるイエスさまが私たちと同行してくださるということです。見失った一匹を見つけ出すまで捜し回る。見つけるまで私たちに探してくださる。徹底的に愛してくださるこの主のお姿に私た

ちは私たちの歩みの中で出会うことが出来るのです。徴税人や罪人は、このことに気づき大きな喜び与えられたのです。また、私たちもです。

トマス福音書にこのような言葉があります。

それを見つけるまで、一匹を探した。彼は苦しみの果てに羊に言った、「私は九十九匹以上におまえを愛する」と。私は九十九匹以上におまえを愛するというイエスさまの恵みの言葉を聞くことができます。

ファリサイ派の人、律法学者のように、その人が見えなく、迷い出たことさえ、いつのまにか気づかずにいるということに陥ってしまいます。いや、恐ろしい心が起きてくる。外へ出そうという心が起きてくる。この人さえいなくなればというそのとき、イエスさまは、私たちに今日の「迷い出た一匹の羊」の譬を突き付けてきます。

いつのまにか私たちの外に迷い出ていった子さえ気づかないばかり、この子さえいなくなればと外へ出そうという心、恐ろしい心が起きてくる、これこそ迷い出た一匹の羊が自分であると気づく。しかし、ここに気づくとき、必ずこの一匹を見つけるまで探し回ってくださるイエスさまは、あなたは愛されているよと必ず気づかせてくださる。ここが大事です。ファリサイ派の人、律法学者が見えなかった隣人が見えてきます。

自分が愛された存在であると感じるとき子どもたちが、神さまの愛の中で、どう育てられているかということが見えてきます。そこには大きな、喜びと勇気が子どもを通して私たちに与えられます。自分が神にいつも探し見出される者であるということ、落ちこぼれであるということに気づくとき、子供らとともに神の愛を共に味わう子どもの心に同伴し、寄り添う者とされます。

牧師室の小窓からのぞいてみると



「彼らはその剣を鋤（すき）に、その槍（やり）を鎌（かま）に打ち直す。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」イザヤ書 2：4

聖書の言葉である。しかし、今のイスラエルは、この言葉を忘れた如く、ガザへの攻撃を強めている現実を見ると、深く考えさせられる。彼らはナチスドイツによって迫害されたことを忘れたのか。ナチスドイツ、以上のことをしてはいないか。

聖書は、単に理想の空ごとをいっているのだろうか。預言者イザヤは、昨日まで迫害されていた者が、権力を得たとき、「彼らはその鋤（すき）を剣に、その鎌（かま）を槍（やり）に打ち直す。国は国に向かって剣を上げ、もはや戦うことしか学ばない。」ということ、だから、イザヤの言葉は今こそ聞けと。マラナ・タ（主よ、来てください）。



園長・瞑想？迷走記

この一カ月、体調を良くなく、病院と大学病院通いをしている。I 病院で点滴を受けていると K 医師の患者さんとの対話が聞こえてきた。まずは、患者さんの訴えをよく丁寧に、優しく聞き、相手の肯定から始まり、相手に寄り添いながら、医学的にどう治療をしていくかと話しながら、これからの治療を一緒に歩もうとされていたのが伝わってくる。

先生の優しい患者さんへの声を聴きながら、眠りに誘われていきながら、聖路加病院で実習した「臨床牧会訓練（感受性訓練）」を思い出した。患者さんとの対話訓練を通して、自分を理解し、他者への理解を深め、感受性、心を柔らかくにして、自分に、患者さんに寄り添っていくという訓練だった。

私は、老いていつの間にか自分はこうだと人を他者を決めてつけていなかったか。園児の、保護者の、先生の、職員の声に耳を傾けることを忘れていなかったかと、K 医師の患者さんとの対話を聞きながら、このような人になりたいと思うと同時にこの人の患者で良かったと安心して眠りに入った。

日毎の糧



聖書：11 わたしの罪に御顔を向けず／咎をことごとくぬぐってください。

12 神よ、わたしの内に清い心を創造し／新しく確かな霊を授けてください。
詩編51：11, 12



ルターの言葉から

私たちの主であり、師であるイエス・キリストが、『あなたがたは悔い改めなさい・・・』と言われたとき、彼らは信じる者の生涯が悔い改めであることを欲したもうたのである」
ルターが95箇条の提題

悔い改め

七つの悔い改めの詩篇（6, 32, 51, 102, 130, 143）の第四番目の詩篇であり、代表的な詩篇です。

ひたすら、罪の贖いは、神の「憐れみ」と「慈しみ」である。人間の業ではなく（祭司的犠牲）、神への憐れみと慈しみを求める祈りです。

表題（1節～2節）は、編集者か、後代の人がダビデの名を付し、さらに詩編を理解してもらおうとダビデの物語、「バテシバ事件と預言者ナタンの諫めの物語（サムエル記11章から12章）を付け加えたものです。

ウリアの妻バテシバを自分のものにしたいというダビデの欲望によって、ウリアを戦死させ、目的のためには手段を選ばずというダビデのやり方に対して、神は預言者ナタンを送り、糾弾しました。その糾弾にダビデは罪を懺悔し、悔い改めるという故事です。

聖書の預言者の声は、焼き尽くされた供犠でなく、「打ち砕かれた霊」、「打ち砕かれ悔いる心」を私たちにそうであってほしいと伝えます。

ルターが言うように私たちの生涯が、悔い改めていく謙虚なものとなれますように。

祈り：世界の指導者が悔い改め、隣の人を愛する人とされますように。

コヘレトから



「空の空 空の空、一切は空である。」、昔は伝道の書、今はコヘレトと呼ばれている聖書の言葉である。人生には短い出会いであっても、自分の人生にいつまでも影響を与える出会いがあった。それはファースト教授の夏の旧約特別特講であった。旧約聖書の諸書と言われるところをファースト先生が講義したのだが、特に「ルツ記」、「伝道の書」は、私の心を捉え、今まで長く向かい合っている。先生の講義は、福音の説教を聞くようであり、多くの慰めを与えられ、福音を味わった。講義の度に知識を得るといよりも、慰めを与えられた。今でも幸せな時間だったと思ひ出す。

この頃、小友聡先生が「コヘレト」と取り組まれている。本を読んでいる。先生の恩師の左近淑先生の話を読んだ。「指導を仰いだのは、当時の旧約聖書の権威、左近淑先生でした。あるとき、左近先生はポロっとうもらされました。『僕はね、旧約聖書の中で〈コヘレトの言葉〉と〈雅歌〉だけはわからない』」と言われたそうだが、左近先生はこの講義に参加されていたように思うが、お父様の左近先生だろうか。今でも左近先生がファースト先生の講義を福音が語られている高い評価をされたことを思い出します。ここで、私は旧約学者、左近を知ったのですが。

小友先生は、「空」を「束の間」と訳される。自分の人生を振り返って、ほんの束の間だとあり、風を捉えるようなものだと感じているが、愉しかった。

(甘木日記)土) 今日も点滴にホームドクターの病院に午前中に行く。明日の主日のために休もう。日) 皆の祈り支えられ、無事に聖餐礼拝を行え、礼拝後、日善幼稚園の将来を考える会議で説明。月) 大学病院に診察後、園に戻り26年度の方針について協議。火) 朝は雨で午前中は過ごしやすかったが午後から猛暑。水) 次年度、運営について設置者、委員長が話す。保育後、職員会議。木) 松崎保育園でビックプレゼントを園児からいただく。嬉しい。自宅待機。金) 幼稚園に行くが早く帰宅する。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。
ぐちらない聖人（牧師）もいます。

土）抗生物質の入った点滴を受けに、ホームドクターの病院に午前中に行く。どの抗生物質が合うのか、それが他の臓器に影響を与えるのか考えながら処方いただく。点滴を受けながら、主治医の患者さんに対する言葉かけに、患者さん寄り添う温かさが伝わってくる。「K先生の患者さん幸せですね。凄いですね」と看護婦さんに言うと「そうなんですよ」と帰ってきた。先生の振る舞いに大いに反省させられ、励まされた。日）今週も朝に迎えの車、帰りも車を出していただく。午後は、好きな日善幼稚園の将来について説明できた。夜は体温 37.5。コロナールを飲んで寝る。月）抗生物質も効き、体調もよく大学病院に検査と診察。入院の有無は、先に延ばされる。それにしても、I病院のホームドクターも大学病院の担当医も心で見えて下さるので安心である。今日も冗談を飛ばしながら診察を受ける。調子も良く、日善幼稚園に行き、26年度の教育・保育、運営について



協議。先生方ひとり一人、今日の労を感謝の（段々と自分で食事の用意一朝食）言葉を伝えられたのが神様の恵み。火）朝、園の掃除をしようと思ったがもし、体力を使い、体調を悪化させていけないと思いとどまる。熱なく過ごしているがこのまま回復をして欲しい。そうはいかないだろう。午後から猛暑。これが堪える。水）保護者がサークルを自主的に作って活動してくれる。互いに交わる場が出来てよかった。26年度の一つの幼稚園の方針を設置者、運営委員長が話し合い良かった。聖書の学び、職員会議と続く、熱が出ない前に帰宅。体力が落ちている。の聖書の学び、礼拝のため体を休める。木）いつものように朝は体調がよく、洗濯をし、松崎保育園へ。聖書の学び、礼拝。子どもたちに話だけでなく視覚にも訴えるために準備する。園児から蝶ネクタイを私の誕生日プレゼント（楽しい、おもちゃを発見 掃除機のルンバのように動きます。）



トに用意をくださった。嬉しく、嬉しくなる。帰宅し、体を休めつつも、15時から羽村幼稚園の zoom 会議に参加。この後、ゆっくりと身体を休める。息子の住む東京・大田区、品川区が洪水状態のニュースが飛び込んでくる。大丈夫か電話をする。想像も出来なかった。金）朝から幼稚園に来て、電話当番。週報などを印刷。昨日の大雨で気なることがあり、丘陵地の大森幼稚園は土圧がかかっているので注意してくださいと園に電話。今週もどにか、ここまできました。用心をして早く帰る。